

【研究課題名】

人間の対等な尊厳はいかにして基礎づけられるか
——理性的能力に基づく内的尊厳とその現れに基づく外的尊厳
という尊厳の二重性を手掛かりとして——

本研究は、人間の尊厳の概念に伴うと考えられる人間の対等性を、尊厳の二重性、つまり理性的能力に基づく道徳的階級という内面的側面と、その道徳的階級にふさわしい威厳と名誉という外面的側面を人間の尊厳の概念は合わせもつという尊厳の特徴に基づいて基礎づけるものである。

人間の尊厳を、この宇宙における人間の高位の道徳的階級として理解するのであれば、人間の尊厳が含意する対等性とは、この宇宙の中で人間が共通の高位の道徳的階級に属することとして理解される。では、このような人間の対等性はいかにして基礎づけられるのか。本研究は、道徳的階級はあくまでも道徳的人格としての格によって決まるという立場から、人間の尊厳の根拠を人間に本性的に備わる道徳的な理性的能力に求めたが、このような立場をとる場合、人間の対等性に関して次のような厄介な問題が生じる。つまり人間の中には高い理性的能力と低い理性的能力をもつ人が存在するのだから、その理性的能力の程度の差に応じて、人間の中にもより上位の道徳的階級に属する人間と下位の道徳的階級に属する人間が存在し、従って人間が皆対等であるわけではないのではないか、という問題である。

この問題に対してはいくつかのアプローチがあるが、本研究が主に取り上げたのは、ロールズの「領域特性（range property）」の概念を用いて対等性を説明するアプローチである¹。領域特性とは、能力の高さに関して一定の閾値を設定し、それを超えて一定の範囲内に収まるような特性のことであり、この概念に基づいて言えば、当の能力が特定の領域の中に収まってさえいれば人間は皆対等だということになる。しかし、このアプローチは、閾値の設定に関して恣意性を回避できないという問題を抱えている²。I・カーターはこの問題を解決するために、対等性を基礎づける際に従来あまり考慮されてこなかった尊厳の外面的側面にも注目して興味深い議論を行っている³。カーターは、個々人が道徳的行為者として異な

¹ John Rawls, 1999, *A Theory of Justice (Revised edition)*, Harvard University Press, p. 444.

² Cf. Richard J. Arneson, 2015, “Basic Equality: Neither Acceptable nor Rejectable,” in Uwe Steinhoff (ed.), *Do All Persons Have Equal Moral Worth?: On “Basic Equality” and Equal Respect and Concern*, Oxford University Press, pp. 30-52.

³ Ian Carter, 2011, “Respect and the Basis of Equality,” in *Ethics*, Vol. 121, No. 3 (April 2011), pp. 538-571.

る能力（「スカラー特性（scalar property）」をもつことを認めながらも、同時に領域特性を設定し、各人をスカラー特性ではなく領域特性の観点から対等に評価することが適切であることを、「不透明尊重（opacity respect）」という考え方に基づいて説明する。カーターによれば、尊厳には外面的な側面もあり、外面的尊厳を守るためには、内面が隠されること、つまりスカラー特性が他人から見えないこと、不透明（opaque）であることが要求される。他人のスカラー特性を不透明なものとし、領域特性に応じて対等に他人を評価するという不透明尊重によって、対等性は基礎づけられるのである。

本研究はこのようなカーターの研究を評価しつつも、尊厳の内面的側面と外面的側面の関係に関するカーターの説明の不備を指摘し、対等性の根拠となるのは、相手のスカラー特性を不透明なものとし、むしろ自分のスカラー特性を隠して不透明なものとする本人の自尊心や恥の感情であると説明した。我々は、自尊心の柔軟性ゆえに、自分と他人の対等性を否定する根拠となりかねない各人の理性的能力（スカラー特性）における小さな差異を度外視して、おおよそ相手と同等と言える理性的能力（領域特性）をもつ対等な道徳的人格としての自尊心を形成する。そして我々は、自らが思い描くその内面にふさわしくない外面が露出することを「恥」と感じ、そのような外面が露出しそうになった場合にはそれを隠し、内面にふさわしい外面を追求する。他人は外面の先にある内面を直接見ることができず、あくまでも外面から内面を推測するしかない。本人がその自尊心に基づき、あくまでも同等の理性的能力（領域特性）までしか推測できないような外面を維持している限りは、他人はその外面から、その人が自分と同等の理性的能力をもっていると推測し、その人が自分と対等な道徳的人格であると認識する。人間の対等性は、このような自尊心の柔軟性に基づき形成されるおおよそ同等の理性的能力（領域特性）を有する対等な道徳的人格としての自尊心によって可能になるのである。もちろん理性的能力は、尊厳の内面的側面である道徳的階級の根拠であることに変わりはないが、これに自尊心の働きが加わることによって、対等性は基礎づけられる。従って、人間の尊厳の対等性は、尊厳の内面的側面（正確には内面的側面である道徳的階級の根拠である理性的能力）と外面的側面（正確には、外面的側面である威厳と名誉を形成する根拠となる自尊心）が協同することによって基礎づけられるのであり、人間の対等性の根拠はこのような尊厳の「二重性」であると言うことができる。このような議論によって、本研究は人間の対等性の根拠を明らかにした。